

こま ざわ がく えん こう ち ない い せき  
駒沢学園校地内遺跡

稲城市東長沼2111  
☎042-378-2111  
発行 2007. 3.15



縄文時代草創期の土器と石器

坂浜の駒沢学園の学校建設に先立って、敷地内に分布していた遺跡の発掘調査が行われました。調査は、昭和59年から62年にかけて実施され、多摩丘陵のなかの尾根部を中心として遺跡が残されていました。発見された遺構は、右表のとおりですが、縄文時代に属するものが中心で、平安時代・江戸時代の遺構も見られました。

縄文時代の遺構は、前期・中期の<sup>たてあな</sup>竪穴住居跡3軒、早期から中期に断続的につくられた<sup>しゅうせきあと</sup>集石跡57基、動物の狩猟用の<sup>おと</sup>陥し穴土坑6基、早期後半の<sup>ろけつ</sup>炉穴2基などです。特に57基も発見された集石跡は注目されました。集石跡は、石を集めて加熱し調理などを行った施設で、現代のバーベキューのような場所です。

石の大きさは、こぶし大ほどのものが中心で、火を受けて表面が赤化したものが多くみられました。遺跡全体では約6700個もの石が使われました。集石跡は出土した土器などから、縄文時代早期から中期にかけて断続的につくられたと思われます。縄文時代の遺構からは、当時使われた土器や石器が出土しました。特に縄文時代前期、中期の土器が数多く発見されています。

平安時代の遺構は、丘陵の尾根の最も高い所につくられた<sup>かそうぼ</sup>火葬墓で、谷部が一望できる場所に築かれて

	遺 構	数量
縄 文 時 代	竪穴住居跡（前期2中期1）	3軒
	竪穴状遺構（前期1中期1）	2軒
	集石跡（早期～中期）	57基
	土壇（前期・中期）	3基
	陥し穴土坑（早期～中期）	6基
	炉穴（早期）	2基
古 代	火葬墓（平安時代）	1基
近 世	竪穴状遺構（炭焼関連小屋）	1基

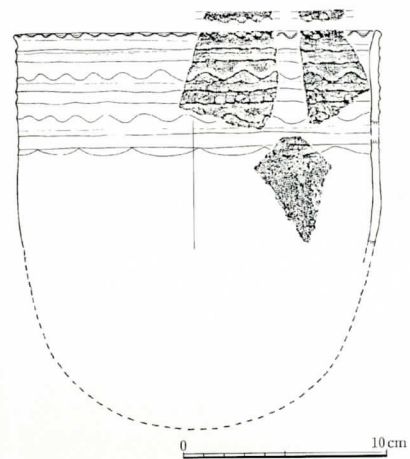
発見された遺構



調査区の全景 (B-2地点)



縄文時代草創期の調査区 (B-2地点)



縄文時代草創期の微隆起線文土器



縄文中期の土器 (阿玉台式)

いました。楕円形の土壌内から発見された蔵骨器は、土師器の甕2個体を入れ子状態にして作られており、中には火葬骨の骨粉が残っていました。蔵骨器の土師器の甕2個体は、土器の特徴から平安時代前半頃のものでした。

江戸時代の竪穴状遺構は、炭焼の作業小屋と思われる遺構です。一辺が約3m前後の長方形の竪穴で、床面からは、少量の木炭の破片が発見されました。炭焼のための作業を行ったり、木炭を集めて置くような施設であったと思われます。

注目すべき場所として、B-2地点の丘陵の縁辺部から発見された、縄文時代草創期・早期の遺物集中区があります。草創期の微隆起線文土器と有舌尖頭器、クサビ形石器、早期の撚糸文系土器が約20m×10mの範囲から集中的に重複して発見されました。草創期・早期の遺物の集中的な出土状態から、この時期の遺構の存在も想定されましたが、調査区域からは発見することはできませんでした。

草創期の遺物では特に微隆起線文土器(カラー写真)が注目されます。この土器は、土器の口縁部から胴部付近の破片3点で、直線的な隆起線と波状的な隆起線を組み合わせて文様を構成しています。全体を復元すると口径約18cmの大きさで、丸底の深鉢形の土器が想定されます。土器編年で見ると、今から約1万年以上前の草創期につくられたことが判りました。縄文時代草創期の時期に稲城市域の丘陵部で土器を作って生活していた人々がいたこととなります。この時期の土器の発見例は少なく、現在のところ稲城市域で最も古い縄文土器といえます。

参考文献. 『駒沢学園校地内遺跡発掘調査報告書』(同遺跡調査会)、『稲城市史上巻』(稲城市)